

日本音楽の研究の内と外

時田アリソン

日本音楽とは

外からみれば、日本の音楽は前近代に発達した「日本伝統音楽」です。海外の日本音楽研究は民族音楽学に属します。つまり韓国、中国、インドネシア、アフリカ、オーストラリア先住民の音楽など西洋以外の音楽の研究ですが、日本でも「民族音楽学」は日本音楽を含まず、「洋楽」との対比で日本音楽は「邦楽」となり、その研究は大学では洋楽や民族音楽学と同じく「楽理科」で行われます。

日本人にとってふつう「音楽」といえば西洋のクラシック音楽です。「邦楽」は日本人には、ある種困ったもののようで、日本人のアイデンティティの中に入っているとは思われず、日本人が「邦楽」を世界に発信したいと思っているという印象はもちにくい。これは、韓国とはっきり対照的です。

David Hughes と編集した *Ashgate Research Companion to Japanese Music* は、日本音楽を網羅しようと、雅楽、声明、平家、浄瑠璃、箏、尺八などだけでなく、日本の「洋楽」、民謡、前近代と近現代のポピュラー音楽、アイヌと沖縄の音楽を扱いました。そのときはまだ浪花節は入れることはできませんでしたが、複数の観点を求めて、日本人と外国人の研究者の論文が半分ずつという構成になっています (Tokita and Hughes 2008)。

2002 年から文科省により中学校で和楽器を教えるよう指導が始まり、日本音楽の入門書は数多く出版されていますが、国立劇場発行の『日本の音楽』ほど幅広いものではありません。しかし残念ながら、そこにも民謡やアイヌ、沖縄の音楽、ポピュラー音楽は含まれていません。

盲点に気づく

日本の音楽を習得し、研究する外国人にはよくあることですが、私は長い間「なぜ、日本人は自分の国の音楽を知らないのか、また知ろうとしないのか」という素朴な問いを持っていました。素晴らしい伝統音楽を無視する日本人はおかしい、いや、ひどいではないかと、独善的に思っていました。そのくせ、30 年間、語り物を中心に日本音楽を熱心に追究した間は日本の「洋楽」との接触を積極的に、徹底的に避けていたのです。

しかし、十数年ほど前から、それは自分で作りだした盲点ではないかと考えるようになりました。韓国ドラマ『冬のソナタ』におけるピアノの役割を考えることがキッカケで、そこから日本の音楽の近代化が視野に入り、なぜ「洋楽」が主流になったのかを考えるようになったのです。特に注目したのが、独奏楽器ピアノの役割、そして自国語の詩に曲を付け、ピアノ伴奏のみで演奏できる芸術歌曲の発展でした。文科省科学研究

費を得て、2015年から2018年まで日本と東アジア、オーストラリアの歌曲について共同研究することができました。

それより前、オーストラリア政府の研究費を得て「戦間期の大阪の音楽と近代」という研究プロジェクトを Hugh de Ferranti と行ない、2008年にはそれをめぐる国際シンポジウムを日文研で開くことができました (De Ferranti and Tokita 2013)。

近代における伝統の役割に注目し、西洋化と近代化の狭間におかれた伝統音楽の変化を明らかにしようとする中で、東アジアとの共通性も意識するようになりました。東アジアのコンテキストの中でみると、西洋との対比だけでは見えてこないことがみえてきます。

近代では、伝統芸能も近代化していました。新しいレパートリーが生まれ、楽器が改良され、新しい楽器編成が行われ、十七弦琴など新しい楽器も作られ、よりくわしく、適切な楽譜が作られました。ラジオやレコードなど近代メディアの影響も無視できません。

新しい「伝統音楽」さえ生まれています。薩摩琵琶、筑前琵琶、浪花節、尺八・箏などの新しい流派。これらの新しい「伝統」の研究はあまりされていません。戦後生まれた演歌の最初の本格的な研究はアメリカの文化人類学者によるものです (Yano 2002)。最近、大阪教育大学の北川純子先生は浪花節の音楽的研究をされています (北川 2016 ほか)。私もこの数年間浪花節の調査研究をしています (時田・岡本 2013)。

ふたたび日本音楽とは

問題は日本の音楽教育にもあります。ここではふれることができませんが、洋楽とともに邦楽も教えれば、日本人は素晴らしいバイミュージカルな国民になるはずです。

日本人も自ら盲点をつくっています。西洋を意識しすぎて、意識は近隣国には向けられません。かれらもまた日本と同じく西洋音楽への憧れを共有しています。しかし、中国や韓国では伝統音楽と「洋楽」との生産的な共存に努めています。

外国人は伝統音楽が変わらずにそのまま、西洋音楽の影響を受けないでほしいと望みます。古い日本を見たがる観光客のようです。国も保存を目指していて、無形文化財に指定されると変えることはできなくなります。こうしたことは伝統を「生きた化石」にしてしまう危険をはらんでいます。

コミュニケーション

日本研究の一部である日本音楽の研究には、日本語の習得が基本条件になります。数多い非西洋音楽の研究に比べ、日本音楽はいろいろな面で文字化され、古代から研究が行われており、特に近代以降はそれをめぐるさまざまな言説がありました。日本音楽の「音」に魅せられても、録音だけでは研究できません。固有の楽譜や歌詞、先行研究を読むためには、古文や漢文を含む日本語を読み、さらにお稽古では日本語で師匠から学

び、学会で研究発表を聞き、日本人学生と同じ授業やゼミに出て、課題をこなさなければならない。外から来た人は内の人と並ぶ、いや内の人にならないといけません。外からの視野は通用しないので、内側にあるアプローチを身につけようとしします。結局は民族音楽学のフィールドワークを行うことになるのです。

外の人が内の人になれるか

長い年月をかけたうえで、社会言語的ルール、お稽古での礼儀作法など社会文化的な能力もふくめ、日本語能力は身につくのですが、それでもコミュニケーションの問題は続きます。そして待っているのは、学問的な期待の「食い違い」。自分がしようとしている研究をなかなかかわかってもらえないという、「行き詰まり」にたどりつきます。

日本に留学して、国に帰り、学位を取得して、大学のポジションを得るのが望ましい進路です。外国の大学では西洋の研究環境と学問文化に身を据えます。日本に戻れば歓迎されますが、やはりまだマレビトです。研究が「完成」せず、国に帰らない場合、だんだん日本人の研究仲間と肩を並べて内の人になるかもしれません。ただ、どうしても受け入れてもらえない可能性は残ります。

研究へのアプローチ

問題は、研究へのアプローチに違いがある、ということです。たとえば「邦楽」研究では音を中心に研究するより、新しい資料の発見、解読、翻刻が重んじられます。長く日本にいる研究者は、日本の研究文化を認識しそれに合わせる必要があります。学問上、コミュニケーションで一番微妙な問題はここにあります。自分の研究目的と考え方を理解してもらうことに苦勞するのです。

私は文部省の奨学金で、1978-1979年に東京藝術大学楽理科に短い留学をすることができました。そこで横道萬里雄先生の指導を受け、能楽の小段構成・積層モデルには、町田嘉章の旋律型の研究などとともに、大きく影響を受けました。その学恩は深いのですが、学界には音楽関係の古い文献の解題や解読を重んじる姿勢があり、当時の私の日本語読解能力で文献を読みこなすのはとても無理だと感じていました。私は音楽の「音」を採譜したり、音楽を習得したりして、現在まで伝承されている音楽を分析したかったのです。

自分の研究をどのように日本で認めてもらうか

自分の研究を日本で認めてもらうために大事なことは、日本語で論文を書くことです。しかし、なんとか日本語で論文を書いたとしても、驚いたことに個人的に反応が得られることはまずありません。また、ようやく手にした研究成果は、日本の研究者には通用

しないということになりがちなのです。せいぜいのところ、外からの視野が評価されるぐらいです。もう一つの問題は、一次資料が日本の研究者の書いたもの、つまり二次資料である場合が多いことです。そうしますと、日本の研究者には大して参考になることはないということもおこります。

日本では深く狭く、生涯に一つの音楽ジャンルだけに力を注いで研究するケースが多いのですが、それは少なくとも英語圏の大学では許されません。民族音楽学者は日本だけでなく、その上に一つ、二つのフィールドを持たなければならないとされます。音楽を相対的にみようとするからです。といって日本学・地域研究に属すれば、日本文化史、現代社会、ポピュラーカルチャーなど現代文化に加えて、日本語も教えなくてはならなくなります。しかも日本の文化といっても、古典音楽を教えられる機会はなかなかないでしょう。

日本における伝統音楽研究者と、ずいぶん事情が異なります。さらに、外部資金や国の研究費を得るためには、いつも同じテーマだと評価されませんし、自分の研究が理解されやすいように、流行りの理論や概念を使うことになり、日本における伝統音楽研究からますます離れていきます。

より広い視野を

よく言えば、外国人特に英語圏の学者は広い視野を持ちます。私の研究分野である語り物は、多くのジャンルからなり、講式声明、平家語り、幸若舞、色々な種類の浄瑠璃、長唄、近代琵琶、浪花節、そして民俗芸能の座頭琵琶、ゴゼ歌、アイヌのユウカラなどがあります。それぞれのジャンルの研究者が独自のアプローチをとり、独自の用語を使います。私は日本の語り物を、ジャンルをこえて一つの全体としてとらえようとしてしました。そのためにはそれぞれのジャンルの研究の枠組みや、用語の不統一を乗り越えなくてはなりませんでした。そのころ、「セクション」をさす用語はようやく「小段」が一般的になっていましたが、基本概念の「フシ」には「曲節」「曲節型」「旋律型」「大旋律型」などがあり、その意味や定義も研究者によって微妙に違うことがありました。今でもそれは基本的に変わりません。

もう一つの違いは、西洋では理論が重要視されていることです。資料の翻刻、翻訳だけでは、評価されません。音楽を分析しなければなりません。しかも、最近流通している文化理論の枠組みで解釈することが期待されています。指導教官がまじないのようには学生にいうのが「あなたの理論的枠組みは何か」なのです。極端な場合、音楽は理論の事例に過ぎないということになります。私は採譜と分析に加えて、G rard Genette (1930–2018) の構造主義的語り理論や、Milman Parry (1902–1935) と Albert B. Lord (1912–1991) の画期的な口語りの理論の観点から、語り物の研究を試みました。しかし、それらの理論は言語テキストを対象にしたもので、音楽分析にそのまま応用できず、自分で方法を見つけなければなりませんでした。

そこで、清元節について 1989 年に提出した博士論文では、音楽における常套的な素材と概念を考えました。フレーズのレベルではさまざまな機能をもつ旋律型を析出し、小段のレベルではジャンルや時代をこえて見出されるサブスタイルという概念を出し、それをもとに分析しました (Tokita 1995)。オーストラリアで日本文化や日本語を教えながら、語り物の通ジャンルの研究を始めていたとき、1998 年度の日文研共同研究を主宰させていただくことになりました。おかげさまでこの語り物共同研究では、私の詳しくない他の語り物のジャンルの研究者、文化人類学、文学の研究者、いつかお話をうかがえればと願っていた方々と議論できるという、夢のようなことが実際におこなわれました。参加していただいた方々、まわりで支えて下さった日文研の方々のおかげで、語り物研究は大きく進展したと思います。また先にのべた、サブスタイルという概念をこの共同研究で発展させ、それを他のジャンルでも適用できることが確認できました。これで、少なくとも平家・浄瑠璃系の語り物をすべて分析できます。ただ、当時も今もまだあまり受け入れられていないのですが。

また私の研究はグローバルな比較研究になりました。韓国の「パンソリ」、中国の「大鼓」や「弾詞」など日本以外の語り物に眼を配り光を当て、日本の語り物の理解を深めようとしています。世界の語り物について、言語テキストの行を基本とする型、連を基本とする型、フシの部分と歌わない部分が交互に連なる説唱型という三つの構造モデルを提案しました。私の研究の主な対象である日本の平家・浄瑠璃系の語り物は、説唱型に近いのですが基本的な違いもあり、いずれの構造モデルにもあてはまりません。特殊なものと思います。

このようにして、僭越ながら平家・浄瑠璃系語り物の研究をまとめて *Japanese Singers of Tales: Ten Centuries of Performed Narrative* として出版することができました (Tokita 2015)。

3 年前に、ジュネーブ高等音楽院の古楽教授フランシス・ビッジ先生から、イタリアの「連を基本とする」語り物オッターヴァ・リーマ (ottava rima) と日本の語り物の比較研究をしませんか、という提案をいただきました。日本の語り物の研究方法が参考になる、とのお考えでした。そこで 3 回に亘って、ジュネーブやコルシカ島などで集中講義やワークショップを行いました。2018 年の 2 月にはビッジ先生は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの「語り物ウィーク」に参加され、公開講座でオッターヴァ・リーマについて発表されました。私にとっては、オッターヴァ・リーマという「連を基本とする型」の見事な事例に出会うことができた、素晴らしい機会でした。この研究交流により、ヨーロッパのコンテクストのなかで日本の語り物の研究を発信できました。

ところで、ビッジ先生と私の語り物研究を結びつけたのは、ジュネーブ高等音楽院の日本人大学院生で、日本の語り物について日本語の情報を集めるよう頼まれ、インターネットで私の研究を探し出したのです。小さな事例ですが、日本の音楽について英語での情報が十分ではないこと、海外で西洋古楽の演奏を学ぶ日本人が日本の語り物について殆ど知らなかったことなど、日本音楽の現状をよくあらわしていると思います。

外国人研究者の役割と価値

日本音楽界は世界への発信にはあまり熱心ではありませんが、外国人研究者は英語なのでできますから、たとえば日本人の研究を紹介できます。日本人の研究の翻訳にも向いています。

逆に、外国人が日本音楽について情報を求めることもあります。日本伝統音楽研究センターにいたころは、英語による問い合わせがたびたび入りました。ビッジ先生もそうです。センターとしては市民向けの連続講座などで、研究成果をわかりやすく伝えますが、英語での発信は積極的にしていませんでした。そこで、2015年から去年まで3回にわたり、箏、尺八、三味線など実技実習つきの Pendulum「英語による日本音楽概論」という夏期集中講座を行いました。ネットなどで海外に英語で広く呼びかけた結果、外国人と日本人が半々ぐらい、多い年は十カ国から35人が参加しました。

変化への挑発

外国人の研究が日本音楽の研究に大きな影響を与えた例があります。パラダイムシフトともいえる、ローレンス・ピッケンの雅楽研究と、ケネス・バトラーの平家物語研究の二つです。

イギリスのローレンス・ピッケン（1909-2007）はもともと動物学者で、中国にも深い関心を持ち中国語と中国音楽を独学しました。唐時代の朝廷音楽の楽譜はもう存在しないと考え、平安時代の雅楽は唐の朝廷音楽に近いはずだと思って、エータ・ハーリヒ＝シュナイダー（1897-1986）の雅楽についての論文（Harich-Schneider 1953）を読んだところ、そこに平安時代の楽譜の写真を見出してびっくりしました。それを見ると現在の雅楽演奏とはずいぶん違うもので、琵琶、楽箏、笙はある旋律をたどっており、特に笙のパートは今の演奏にある「あいたけ」（一種の和音）が全然書かれておらず、基音だけが記されていたので、それが唐の時代の旋律に違いないということにすぐ気づいたのです。

現在の雅楽を聴くと、箏と龍笛の旋律が他の楽器に伴奏されているように感じがちですが、もともとは五つの旋律楽器がその物理的限界を生かしながら、別な音域でヘテロフォニー的に同一旋律を弾いていたこと、その演奏は、もっと単純で速度も今より数倍速かったことを、ピッケンは後に発見します。

ピッケンは自分も雅楽の古い楽譜を購入しはじめました。やがて1972年に初めて日本に来て、内閣蔵、宮内庁蔵、陽明文庫蔵の楽譜を実見し、コピーを取ることができました。帰国してからは博士課程の学生を募集して、古い楽譜を共同で解説しはじめました。研究成果はその学生たちの博士論文となり、他に1981年から2000年にわたって7冊の本となりました。この研究は1980年代半ばから、日本でも知られ始めましたが、強い反対に会っています。その理由は、すべての現存資料を検討しないと断言できない、漢字の読み誤りがあり研究内容が信用できない、日本では唐楽を八世紀から忠実に伝承

しているなど、いろいろでした。また、「我々はもうそれを知っていた！」という声もありました。実は、ピッケン以前にも林謙三(1899-1976)や作曲家の増本伎共子(1937生)が、似たような考えを発表したことがあったのです(増本1968)。30年以上たった現在では、ピッケン説は新しい世代の雅楽研究者の通説になってきています。通説を変えたのは外の人の説だったのです(Hughes 2010)。

ケネス・バトラー(1930-2009)も音楽学者ではなく、『平家物語』について1964年にハーバード大学で博士号を取得しました。明らかに彼は1960年にハーバード大学出版局から出たロードの*The Singer of Tales*を意識していました(Lord 2000[1960])。日本に来たバトラーは1966年から1969年にかけて、萌芽的な小論文三つで『平家物語』の口頭性と、その生成における琵琶法師の役割について論じました(Butler 1966a; Butler 1966b; Butler 1969)。

1975年の『平家物語』のシンポジウムでのバトラーの発表で、日本の平家学者は初めてパリー＝ロードの語り理論を知ったようです。山本吉左右はバトラーの研究にふれ、それを語り物のゴゼ歌に応用しました(山本1976a、1976b、1977)。

この語りの理論は平家研究を分裂にみちびきました。口語りが『平家物語』の起源だとする説と、書かれた文章を起源とする説の二つの陣営がありますが、今はその対立は弱くなっており、両方を認める立場がやや主流になったと思われます。山本の1988年の著書は、語り理論の観点からゴゼ歌、幸若、説経節を扱いましたが、もうバトラーにはふれていませんから、パリー＝ロード理論は日本に定着したのでしょう(山本1988)。兵藤裕己らは平家だけでなく、座頭琵琶などの語り物にこの理論を応用し、口頭性の理解に新たな地平を開きました(兵藤1997など)。このように平家物語研究は大きく変わりました。

以上は平家物語研究に与えた影響ですが、平家をはじめとする私の語り物の音楽的研究も、パリー＝ロード理論の常套性という概念を取り入れたことで深まり、語り物全体の把握につながったことはもうお話ししました。

参考文献

- 北川純子「初代春日井梅鶯による浪曲の「節」における定型性と変形性―[骨格式]に基づく分析を通して」『大阪教育大学紀要 第I部門 人文社会科学』65(1)、2016年、pp.13-31.
- 時田アリソン・薦田治子編『日本の語り物―口頭性・構造・意義』日文研叢書 = Nichibunken Japanese Studies Series. Vol. 26. 国際日本文化研究センター共同研究報告、国際日本文化研究センター、2002年。
- 時田アリソン・岡本洋一編『浪花節のフィールドワーク・大阪天王寺一心寺門前浪曲寄席および東京浅草の木馬亭を比較して』同志社大学、2013年。
- 兵藤裕己「口承文学総論」『岩波講座日本文学史第16巻 口承文学 I』pp. 1-50、岩波書店、

- 1997 年。
- 増本喜久子『雅楽—伝統音楽への新しいアプローチ』音楽之友社、1968 年。
- 山本吉左右「口語り」の論—上—ゴゼ歌の場合『文学』44 (10)、1976a、pp. 1365–1386.
- 山本吉左右「口語り」の論—中—ゴゼ歌の場合『文学』44 (11)、1976b、pp. 1470–1478.
- 山本吉左右「口語り」の論—下—ゴゼ歌の場合『文学』45 (1)、1977、pp. 89–107。
- 山本吉左右『くつわの音がざざめいて—語りの文芸考』平凡社選書 Vol. 122、平凡社、1988 年。
- Butler, Kenneth D. "The Textual Evolution of the Heike Monogatari." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 26 (1966a), pp. 5–51.
- Butler, Kenneth D. "The Heike Monogatari and Theories of Oral Literature." *Seikei Daigaku: Faculty of Letters Bulletin* 2 (1966b), pp. 37–54.
- Butler, Kenneth D. "The Heike Monogatari and the Japanese Warrior Ethic." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 29 (1969), pp. 93–108.
- De Ferranti, Hugh and Alison Tokita (eds). *Music, Modernity and Locality in Prewar Japan: Osaka and Beyond*. Farnham, Surrey. Burlington, VT, USA: Ashgate, 2013.
- Harich-Schneider, Eta. "The Present Condition of Japanese Court Music." *The Musical Quarterly* 39:1 (1953), pp. 49–74.
- Hughes, David W. "The Picken School and East Asia: China, Japan and Korea." *Ethnomusicology Forum* 19:2 (2010), pp. 231–239.
- Lord, Albert Bates. *The Singer of Tales*. Eds. Nagy, Gregory and Stephen Mitchell. 2nd ed. / Stephen Mitchell and Gregory Nagy, editors. ed. Cambridge, Mass. London: Cambridge, Mass. London: Harvard University Press, 2000.
- Picken, Laurence E. R. et al. *Music from the Tang Court*. Vols (fascicles) 1–7. Oxford, UK: Oxford University Press (vol.1) and Cambridge, UK: Cambridge University Press (vols. 2–7) 1981–2000.
- Tokita, Alison. *Kiyomoto-bushi: narrative music of the kabuki theatre*. Studien zur traditionellen Musik Japans 7. Kassel [Germany]: Baerenreiter, 1999.
- Tokita, Alison and David W. Hughes (eds). *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Aldershot, Hants, England; Burlington, VT, USA: Ashgate, 2008.
- Tokita, Alison. *Japanese Singers of Tales: Ten Centuries of Performed Narrative*. Farnham, Surrey, England. Burlington, VT, USA: Ashgate, 2015.
- Yano, Christine Reiko. *Tears of Longing: Nostalgia and the Nation in Japanese Popular Song*. Ed. Harvard University. Asia Center. Cambridge: Cambridge: Harvard University Asia Center: Distributed by Harvard University Press, 2002.